北海道の国際協力情報紙
であい
vol.70 2013 AUTUMN
公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC／ハイエック
Hokkaido International Exchange and Cooperation Center

特集 HIECC主催事業から「留学生地域交流事業 in 幌加内」

9月1日(日)と2日(月)の2日間の日程で、道内の大学に学ぶ留学生及び海外技術研修員(中国、韓国、エジプト、インド、インドネシア、ブラジル、パラグアイ、イタリア、ウクライナ、台湾、計10カ国・地域)と日本人学生あわせて29名が、幌加内町を訪れ、「世界そばフェスタ」への参加や「そば打ち体験」を通して地域住民との交流や、北海道の文化に親しんだ。

幌加内町の半纏を着て町長と記念撮影

9月1日(日)に参加した「世界そばフェスタ」では幌加内町にご協力をいただき、学生たちは、町よりお借りした半纏を着用し、参加者同士の交流に興じたり、内外のそば粉を使った料理を楽しんだりしたほか、「そばの早食い競争」に男女1名ずつの学生が参加。他の学生たちは賑やかに応援をして会場を盛り上げた。

また、会場内に設置された世界そば料理の各出店ブース(世界12カ国が出店)に学生2～3名ずつが「販売サポート員」として参加し、地元出店者や留学生同士助け合いながら祭りや食文化を楽しんだ。

9月2日(月)には、幌加内町の職員より「そばを活用した町づくり」についてレクチャーを聞き(幌加内町では昨年度より、役場内にそば振興係を組織し、地域振興に取り組んでいる)、町が一体となった取り組みについて理解を深めた。その後の「そば打ち体験」ではグループ毎の共同作業により、はじめての体験に苦戦しながらも言葉の壁を越えて身振り手振りで互いに協力し合っていた。講師の手際のいい指導のもとに、笑い声やかけ声が絶えない雰囲気の中で進められ、出来上がったそばを試食した際には、「自分たちで作った」という達成感を感じていたようである。

「私たちが作ったそばです!」

ディスカッション「特産品を使った地域振興について」

その後行われた「ディスカッション」では、これまでのプログラムを振り返りながら“特産品を利用した地域振興”に関する意見交換をおこない、グループで互いに自国の事例を紹介しながらアイデアを出し合い、各グループから発表してもらった。それぞれのグループからの発表では特産品のブランド化、メディアの活用、ユニークな加工品づくり、工夫したイベントの開催等、様々な意見が出され、留学生の感性を発揮した自由な意見が飛び交って有意義な内容となった。

参加した留学生からは、「高校の授業にそば打ちが取り組まれていることにびっくり」「帰国してからもそばを作ってみたい」「そば粉からいろいろな料理ができるとは知らなかった」「地域振興について、いろいろな国の人と話ができて、貴重な機会だった」など、たくさんの喜びの感想が寄せられた。

留学生は、学術交流のみならず、将来の両国の交流の架け橋として期待できることから、当センターでは、北欧やアジア諸国など海外向けに、大学訪問やプロモーションサイトの運営(http://study-hokkaido.com/)など、留学生受入促進のためのプロモーションを積極的に展開しているところである。また、実際に北海道で学んでいる留学生に対し、北海道の文化紹介や地域住民との交流の場づくりなど、北海道への理解を深めてもらうことも重要なことである。このようなことから、今後とも地域交流の機会を企画し、留学生交流を通じた地域の国際化の推進にも力を入れて取り組んでいきたいと考えている。

そばの早食い大会。留学生が2位に入賞!

さっぽろ留学生日記

ドラえもん大好き! 衛星からマップデータを分析、初期消火に役立てる研究を行う

ニナ　ユリアンテイ さん
インドネシア共和国
(北海道大学大学院工学研究院 博士課程 空間形態学 専攻)

ドラえもんに会える?!

出身は、オランウータンなどの野生動物の楽園といわれるカリマンタン。大学では土壌学を専攻し、その後地元の大学で講師として働きながら研究を継続。ある日、所属研究室の教授から、JICA(ジャイカ＝国際協力機構)との共同研究のため、北海道大学に留学する学生を探していると言われ、「小学校から大好きだったドラえもんに会えるかも」と密かに(?)淡い期待を寄せ留学することに。インドネシアでは、安全で高品質の日本車や電化製品のイメージがあり、「今でも多くの人が憧れている国。まさか自分にそんなチャンスが巡ってくるとは」と。日本での留学は夢にも思わなかったそう。

故郷の豊かな森林再生のために

研究テーマは、「インドネシアの泥炭・森林における火災と炭素管理」。カリマンタンは熱帯雨林など天然資源が豊富な一方で、1990年代後半から頻発する山火事で広大な面積の森林が失われている。ニナさんが携わっている研究は、衛星からの森林マップデータを分析する。そのデータが蓄積されると、火災の早期探知や初期消火にも役立ち、また将来起こりうる山火事の予防にも繋がる。「日本と共同研究することによって、NASAから比較的容易に衛星データの提供を受けることができ、信頼性の高いデータやマップが作成できました」と笑顔で語っていた。

好きな季節は“カラフル”な春と秋

留学前は、日本＝東京というイメージだったが、札幌に来てみると中心部でも花や緑があって、地元の街と雰囲気が似ていると感じたそう。「色とりどりの花が咲く春と、紅葉の時期の秋が大好き。特に秋はロマンティックだなぁと思います」と。都会とちょっぴり田舎の要素を持ち合わせている札幌は、「留学先として理想的な場所です」と太鼓判を押していた。

これからも日本と共に

3年半の研究を終え、この秋インドネシアに帰国する。「これからも北大との共同研究を通じて、会議などで北海道に来るかもしれないし、また北大で研究を続ける可能性があるかもしれないです」と。故郷の自然を守る研究を通じて、ニナさんの優しい笑顔がインドネシアと北海道との繋がりをさらに深めていってくれるに違いない。

ついに!? 大好きなドラえもんと記念撮影

ハイエック(公益社団法人　北海道国際交流・協力総合センター)会員 入会へのお願い

北海道国際交流・協力総合センター(HIECC／ハイエック)は、北海道における国際活動の総合的、中核的な拠点として、世界各国との国際交流・協力活動などを通じて北海道の振興発展に貢献して参ります。

年会費	法人等会員	1口	10,000円
	一般個人会員	1口	5,000円
	学生・主婦・シニア等会員	1口	2,000円

入会のお申込みは随時受け付けております。また、入会口数は1口に限らず何口でも結構です。

会員特典

1　シンボルマークの会員バッジ進呈
2　季刊紙「Hoppoken」(年4回)、「年報」、国際協力情報紙「であい」(年3回)を配布。
　(ホームページの会員専用ページでは「Hoppoken」のバックナンバーの閲覧が可能)
3　外国旗の優先貸出し
4　視察訪問先等の情報提供など

HIECCの主な事業

国際交流・国際協力情報の提供、国際理解講演会・セミナーの開催、海外派遣事業、国際交流事業への助成、通訳ボランティアの派遣、留学生と地域のふれあい交流、調査研究事業など

公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC／ハイエック
〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目 道庁別館
発行日：2013年11月5日
TEL. 011(221)7840　FAX. 011(221)7845　http://www.hiecc.or.jp
E-mail：intc@hiecc.or.jp(交流・協力部)
印　刷：岩橋印刷株式会社

私の国際協力活動日記

第7回

マダガスカルに派遣されてから、帰国後…

林　さゆり さん

何か自分に出来ることで人の役に立つ仕事がしたいと考えている時に電車の中でJICAの青年海外協力隊応募広告を見つけたのをきっかけに、2009年９月からマダガスカルに２年間派遣されることになりました。

配属された場所は、特別支援学校という名で６歳から35歳が一緒になって勉強をしていました。小学生と成人が勉強をするというのがとても異様に感じたので、成人対象には、作業学習を導入し今後自立が出来るように現地の指導員と一緒に試行錯誤をしながら考え、小学生には、レベルに合わせた学習を導入する活動をしました。派遣されたときは、現地の人には若い外国人に何ができるのだ?と受け入れてもらえることが出来ず活動がうまく進みませんでした。時間をかけて子供たちと接し成長が見られたときに段々と信頼をしてもらえるようになりました。

２年間のマダガスカルでの生活で、何事にも感謝の気持ちを持ち、お互い助け合って生きていくという事を強く感じました。その気持ちから、海外だけではなく母国である日本でも私が出来ることがないかなと思い、現在、北海道のニセコ町地域おこし協力隊をしています。ニセコ町では、保健福祉課に配属になり、幼児センター、地域活動支援センター（障がい者の支援）、図書館、学童保育などを巡回し、必要とされる補助をしながら、ニセコ町を多くの人に知ってもらい、ニセコ町を今以上に盛り上げていけるように考えて毎日活動をしています。

マダガスカルと日本では、活動の仕方は違うけれど、困っていることを少しでも解消できるサポートが出来たらいいなと思っています。これからも、日本だけではなく海外でも自分が出来ることがあったら自分なりに出来る活動をしていきたいと思います。

青年海外協力隊　平成21年度　２次隊
職　種 ： 養護
派遣国 ： マダガスカル

マダガスカルの子どもたちと

カルチャーナイト2013 @HIECC

7月19日（金）午後6時半～午後9時

カルチャーナイトは北欧が発祥の行事で、いつもは日中しか開いていない文化施設や公共施設などを市民が夜間に見学・訪問できるイベントとして始まり、開催11回目を迎える。今年は、札幌市内だけでも100カ所以上の施設が参加した。

難問続出!?「世界のクイズ」

HIECC（ハイエック）は今年もこのイベントに参加し、南米からの北海道海外技術研修員及び移住者子弟留学生、札幌市内留学生などの外国人の協力を得て「世界の遊びとクイズ」、「ワールドカフェ」、「世界の民族衣装を着てみよう」と身近に世界を感じられるようなプログラムを組んだ。また、北海学園大学人文学部の学生18名が、通訳や案内役としてイベント運営の補助をしながら活躍した。

「ワールドカフェ」では、パラグアイのマテ茶など少し珍しいお茶を飲みながら、留学生たちと賑やかにおしゃべりを。「ナイジェリアはどこにあるの?」、「ブラジルで一番有名な食べ物は?」など子どもたちからの質問に、地図や写真を使いながら笑顔で答える留学生。HIECCの会議室の中で何カ国も訪問?!でき、子どもたちの表情はなんだかうれしそうだった。

おしゃべりで世界を身近に「ワールドカフェ」

「世界の遊びとクイズ」ではブラジル・パラグアイ、そしてナイジェリア・マラウイに関する難問が続出。クイズの答えが発表されると、今まで知らなかったことに驚きだけでなく感心する反応も。中には真剣にメモを取りながら聞いている参加者もいた。コーナーの最後は、全員で「アフリカンダンス」。子どもたちはアフリカ音楽のリズムを体で感じ、少し恥ずかしそうにしながらも楽しそうに踊っていた。

アフリカの踊りって楽しいね!

家族連れや、学校帰りの高校生など約200名が、道庁別館12階のHIECCを訪れ、国際的な雰囲気に包まれた夏の一夜を過ごしていた。

第４回「日中韓ユース・フォーラム」札幌で開催

（ 9月17日～20日　札幌コンベンションセンター、札幌大学ほか ）

「日中韓ユース・フォーラム」は、３カ国の国連協会のイニシアティブで2010年に始められ、第1回（2010）は日本、第2回（2011）は中国、第3回（2012）は韓国で開催され、そして第4回（2013）は日本・札幌で4日間にわたり開催された。（取材は18日に行われたシンポジウムのみ）

このフォーラムは、未来を担う若者たちの相互理解促進、人材育成とネットワーク構築を通じて、北東アジア３カ国の長期的なパートナーシップ形成と、世界に開かれた東アジアの協力関係の構築を目指すもの。今回は、日本から40名、中国と韓国からは各20名の大学生が札幌に集結した。今回のシンポジウムでは、（1）東アジア文化と西洋文化ー人類社会の安寧と発展を目指す創造的共生、（2）ユースと女性の声を国連会議と日中韓３国首脳会議の政策に反映させる策、（3）デジタル・ディバイド（情報格差）ー企業・市民社会・国連の協力による革新的対応、という３つのトピックについて、会場の札幌大学で流暢な英語を駆使しながら熱い討論が交わされた。

シンポジウム前半は、参加者が5～6名程度の小グループに分かれ、グループ内で決めた進行役を中心に話し合いを開始。また、約2時間話し合った内容を全参加者が互いに共有できるよう時間内に要点をまとめ、発表資料を迅速に作成することも要求されていた。広範にわたるトピックにも関わらず、各参加者が簡潔に意見をまとめながら発言し、その中で３カ国間の共通点や相違点を認識しつつ、どのような解決法があるか真剣に語り合い資料作成を進めた。

各テーブルで白熱した討論が繰り広げられる

後半のグループ発表では、「シニア層が若者の意見を無視しているのでは」、「新しい考えに対して消極的なのではないか」、「日本、中国、韓国が互いに連携を取り知識や解決法を共有することで、新たなロールモデルを形成できるのでは」など、ときには鋭い意見も出ていた。

グループの代表が討論の要点を堂々とした姿で発表

昨今の日本では、若い世代の「内向き志向」を克服し、グローバルな舞台で活躍できる「グローバル人材育成」の必要性がうたわれているが、堂々とした姿で自分の意見を述べる3カ国の若者の姿は、世界で活躍できる力をすでに備えているようだった。このフォーラムに集ったメンバーがこれからの東アジアの未来を構築し、さらにアジアの代表として世界を牽引していくのだろう。

「大沼ラムサール国際シンポジウム」

（ 9月12日　木曜日　七飯町大沼 ）

シンポジウム会場の大沼国際セミナーハウス

2012年7月に大沼が「ラムサール条約登録湿地」となってから約1年と2カ月。沼の環境を守るとともに、ワイズ・ユース《「賢明な利用」の意》の視点から、地域でどのような取り組みができるかを考えるシンポジウムが大沼国際セミナーハウス（七飯町）で開催された。（主催：一般財団法人北海道国際交流センター（HIF））

長尾自然環境財団常務理事の名執氏による基調講演からスタート。名執氏は1993年に釧路で行われた第5回締約国会議の準備室長を務め、さらに2005年には日本国内のラムサール条約湿地を20カ所新規登録に携わった経験から、ラムサール条約が地域にもたらすメリットについて事例を用いながら話を進めた。

地域住民、留学生などが参加。多角的な意見交換がされていた

その後、ラムサール条約に登録されている九重（大分県）や霧多布湿原、そして地元関係者4名によるパネルディスカッションが行われ、会場に参加している住民との質疑も交えながら意見交換がされた。先に登録された湿地で今までどのような取り組みをしてきたか、また地域住民とどのような活動をしてきたか等の具体的な話があり、大沼のこれからの取り組みにとって参考になる内容となっていた。また、住民からは、「1980年頃から大沼の水質が悪化し、今後は北海道新幹線が町を通る。ラムサール登録を機会に、ただ沼の保全計画を作るのではなく、具体的に何を守るかを話し合っていきたい」という意見も。最後に名執氏から、「保全計画として数値と期間の目標を作ると良い」、「行政、農業や漁業等各産業の関係者、住民、子どもが一緒に活動することが重要」とまとめの言葉があった。

ラムサール条約とは

正式名称：「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」。1971年にイランのラムサールという町で締結されたため「ラムサール条約」と呼ばれるようになり、日本は1980年から加入。

近年は様々な生き物の生息地として重要視され生物多様性保全に関する地球規模の条約となってきている。締約国（加盟国）数は168カ国で条約湿地は2,160カ所（2013年8月末現在、名執氏講演資料より）